

# 鳳凰丸建造

ペリー来航によって江戸湾防備の重要性を感じた幕府は、浦賀奉行所に軍艦建造を命じました。浦賀湊で造られたこの軍艦はどのようにして誕生したのでしょうか。

平成 24 年 (2012 年) 1 月 1 日

第 28 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

# 浦賀文化

浦賀奉行所が、数年にわたって言い続けてきた軍艦建造の重要性がようやく理解される時が来ました。嘉永六年(一八五三)九月、幕府は、それまでの大船建造禁止令を廃止し、浦賀奉行所に軍艦建造を命じました。これが日本で最初に誕生した大型洋式軍艦「鳳凰丸」です。

建造掛には香山栄左衛門、中島三郎助など十人の与力、同心が任命されました。

軍艦の建造場所は浦賀奉行所ご用達の大工勘左衛門が所有している、東浦賀・大ヶ谷町蛸ヶ浦(おおがやちようかきがうら)です。ここは現在の住友重機浦賀工場の跡地のある場所です。鳳凰丸が誕生しただけではなく、咸臨丸がアメリカへ出航する前に修理のために入った日本で最初のドライドックがあった場所でもあります。

建造場所は※菱矢来(ひしやらい)で囲われ、幕が張られ、提灯が立てられて一般の人々の出入りが制限されました。もちろん中で働く人にも厳重な注意や禁止事項が言い渡されました。

まず、第一は「火の用心」です。特に「くわえキセル」は厳禁とされました。その次は建造場所への出入りに関することで諸職人、人足には鑑札が支給され、退出する際は入口にある会所に鑑札を置いていくことが決められました。

この他には、喧嘩口論の禁止、飲酒の禁止などがあり、最後に就業時間が決められ、作業の開始、昼食、夕食、終業などはすべて太鼓か拍子木で知らせることになっていました。就業時間は、基本的には自然の明るさがあるうちで、早朝から手元が見えるまでが基準でした。こうして、長さが三十六メートル、幅九メートル、深さ四・五メートルで大筒四門、中筒六門を装備した鳳凰丸は、嘉永七年(一八五四)五月に完成しました。造り慣れている千石船(弁財船)と呼ばれる船でさえ着工から進水まで半年ほどかかった時代に、鳳凰丸は三カ月で進水までこぎつけ、完成まで八カ月という驚異的なスピードでした。

※菱矢来(ひしやらい) 竹をひし形に組んだ垣や塀のこと

同じく、五月には、建造にあたった中島三郎助、佐々倉桐太郎らが中心となり浦賀奉行以下総勢百三十人を乗せて館山沖までの「乗試し」(試運転)や大砲の実射などが行われました。さらに安政二年(一八五五)江戸で幕府の首脳に披露したときには、品川沿岸を警備していた者が異国船と間違え、幕府に届けたという記録もあり、その出来栄の良さがうかがえます。

しかし、今日まで鳳凰丸に関する評価は高いものではありませんでした。それは、時代が帆船から蒸気船へと急激に変化している時代でもあり、さらに勝海舟が「やつかい丸」などと称し、「外観を洋式に模したにすぎない和船構造の脆弱(ぜいじゃく)な船でしかない」と評価していたことが大きな原因です。

鳳凰丸は本格的な軍艦ではなかったかもしれませんが、近代の軍艦としては第一号の建造であり、のちの軍艦建造に大きな影響をあたえたのではないのでしょうか。

その後、幕府がオランダ、イギリス等の製造した軍艦数隻を保持することにより、鳳凰丸の軍艦としての必要性がうすれました。そして、慶応二年(一



鳳凰丸 (模型)

八六六)江戸石川島において改造し、幕府の運輸船に転用され明治二年(一八六九)函館戦争で明治政府に拿捕(だほ)されるまで使用されました。

新緑の頃、浦賀湊に姿を現した「鳳凰丸」は、とても勇敢で美しかったことでしょう。残念ながら今は、その姿を見ることは出来ませんが、浦賀文化センター展示室にある朱色に塗った船体、白地に中黒の帆の「鳳凰丸」(模型)からでも十分に実感することが出来ます。是非一度、お越しください。

## ★参考資料

- 浦賀ストーリー 山本詔一著
- 幕末 浦賀軍港建造記 山本詔一著
- ピットル来航と鳳凰丸建造 山本詔一著
- 港湾浦賀の歴史 後藤正吉著



# 歴史語らい座・浦賀二十八

郷土史家 山本 詔一



## ●会津藩の江戸湾警備●

文化七年(一八一〇)二月二十六日、老中松平伊豆守信明から会津藩主と白河藩主に対して登城の命があった。この時、会津藩主・松平容衆(かたひろ)は数え年で七歳であり、元服前であったので金之助と名乗って、会津のお城にいた。名代として親戚筋の飯野藩主・保科能登守(現在の千葉県富津にあった二万石の大名)が登城した。一方の白河藩は「寛政の改革」の立役者で老中経験があり、会津藩主の後見役の松平定信が登城した。

老中からの命は、「異国船漂流手当のため、相州浦賀辺並びに安房・上総浦々々大筒台場取建について」と、三浦半島と房総半島に砲台の建設を求めたものであった。また「浦々の最寄の宜しい所と領地を引き替える」ことも命ぜられた。

この時点では会津藩が三浦半島を警備することは決まっていなかった。

候補地である三浦半島と房総半島を検分するために、会津藩は軍事奉行の丹羽織之丞を派遣し、白河藩主と幕府の

役人を同行して現状視察が行われた。

その結果、会津藩は土地の格が上であることを理由に浦賀周辺を望んだ。この陰には武士のプライドがあり、会津藩と白河藩を比較すると会津藩の方が格が上であることから、警備場所も土地の格が上の浦賀周辺の警備につくことは当然のことと想っていた。しかし、相手は現状では会津の後見役で、老中経験者の松平定信に格式や権威をちらつかせることはできなかった。

そこで会津藩家老の西郷頼母は、幕府若年寄の堀田摂津守に「もしも会津藩が房総半島の警備と決まったならば、会津の士風において、武士道の面目を失ったとして、藩士は黙っていないでしょう。」と半ば脅迫文めいた書簡を送った。この結果、幕府は七月十五日、会津藩の三浦半島警備を正式決定した。会津藩は再度、軍事奉行・丹羽を三浦半島検分に出掛けさせた。

丹羽の検分で三浦郡の大部分と鎌倉、久良岐両郡の一部を入れた九十二村が会津領になることになった。東西の浦賀は港に面した所は浦賀奉行

所持ちとして残ったが西浦賀の吉井や久比里、長瀬は西浦賀分郷として会津領となった。これは灯明堂付近(平根山)に台場を築くのに不便であるとして灯明堂周辺にまで及んだ。この決定に驚いた浦賀の人々は、「東西浦賀は御番所のお陰で生活をするのができ有り難く思っています。ですから御番所の御用であれば、昼夜に関係なく勤めてきました。しかし今回の決定が実施されますと、村人の負担が増え、御番所の仕事に重きをおけば生活に支障をきたし、こうした事態が続けば当然村が衰微することは明らかです。」と訴え、分郷反対の訴願をした。

この訴願は、普段はあまり仲の良いくない東西浦賀の村役人をはじめ、町頭(ちようがし)らと読み、現在の町内・自治会長のこと(が)がごぞつて名を連ねている。

東浦賀村からすれば、分郷があつてこそそのバランスであつたので、分郷が実施されることで負担増を回避したい思ひであつたことが想像できる。

文化八年五月、会津藩の三浦半島進駐が開始された。

## 第21回【特別展示会】のお知らせ

◆日時◆  
2月11日(土)～2月19日(日) 10:00～16:00

◆場所◆  
浦賀コミュニティセンター分館

◆テーマ◆  
「浦賀の廻船問屋の生活 ～萬屋清左衛門家～」

### 基調講演

◆日時◆  
2月11日(土) 13:30～15:00

◆場所◆  
浦賀コミュニティセンター集会室

◆テーマ◆  
「浦賀の廻船問屋 ～萬屋清左衛門家～」

◆講師◆  
郷土史研究家・宮井新一さん

基調講演、展示会ともに多数の皆様のご来場をお待ち申し上げます。

## 笑話一題

昨十一月初め、深まり行く秋に郷愁を乗せ「みすずかる信濃の国」へバスの旅に出た。

主な旅先は松本城、上高地、先のNHK朝ドラ「おひさま」のロケ地・安曇野などで宿泊は小説大菩薩峠に「五彩けんらんたる絶景」と謳われた白骨温泉郷であつた。

先ずは旅の善し悪しはお天気次第。一行には雨男と雨女は居ないらしく前日までの雨に代えて終始、絶好の日本晴れに恵まれた。松本城は往時の其のままを遺す国内でも数少ない国宝の城として知られる。私の大好きな上高地。四十余年前に訪れたときと変わることなく、梓川の清流と背にした北アルプスの

山々。山頂は鮮やかに白雪を頂いて居た。周りは落葉折しも紅葉真つ盛り。散歩中、頭や顔に何か当たる細かなものがある。なんと落葉松の針葉であつた。そう云えば大正池から河童橋までの小一時間の散策路は針葉の落ち葉で敷き詰められて居て、さながら黄金の絨毯であつた。衰えつつある脚力には実に心地よい。この感触この風景、何処か会つたような気がする。そう、処は異なるが野原を駆け遊んだ幼な日の頃とそっくりではないか。

冒頭の「みすずかる」は信濃の枕ことばである。生まれて育つた処、働き暮らして育つた処、何れも大切なふるさとである。(山国育ち)